

## 今週のメニュー

## ■トピックス

- ◇「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム -IN 東大-」  
-開催報告-

## ■随想

- ◇古代ヤマトの遠景（81） -【蘇我氏による歴史改竄】-

木下 清隆

## ■編集後記

## ■トピックス

- ◇「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム -IN 東大-」  
-開催報告-

去る、11月22日、伊藤国際学術センター（東京大学内）において昨年に引き続き「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム」を開催し、約300名の方々にご参加を頂き盛況の内に終了致しました。

低燃費自動車（エコカー）や省エネ家電は身近に感じられても、住宅・建築物の省エネとなると少し遠く感じられる方も多くおられるのではないのでしょうか？近年は住宅エコポイント等の制度のお陰で住宅の断熱や省エネが大事であることが大分認識されるようになってきましたが、実際に何をすれば住宅の断熱や省エネになるのか？自動車や家電のように単体の製品でない住宅は理解がしづらい面があるかと思えます。

現在、住宅に係る省エネルギー基準における断熱水準は1999年に制定された次世代省エネルギー基準と呼ばれるもので、すでに14年が経過しています。これまでこの基準は、推奨はされていたものの義務化はされていなかったことから新築住宅の一部しかこの基準を満たすことがありませんでしたが、今後は2020年までに段階的に義務化をして行くことが今年になって決まりました。ストックが全国に5000万戸あると言われる住宅の省エネ、断熱は一朝一夕にできることはありませんが、今後のエネルギー問題を考える上でも非常に重要な問題となってきています。

このような状況の下、(独)建築研究所の坂本理事長を本シンポジウムの代表、コーディネーターにお招きし、この度のシンポジウムの開催となりましたが、大きなテーマは住宅の省エネや断熱のためには何が重要か？更には将来の日本の住宅が省エネ、断熱の観点からどうあるべきか？ということ議論して頂くことにありました。その概要を以下にご紹介します。

坂本代表の開会のご挨拶に続き、来賓を代表して経済産業省住宅産業窯業建材課の三橋課長様よりご挨拶を頂きました。経済産業省省エネルギー対策課の福田課長様はじめ行政からも沢山の方にお見え頂きシンポジウムに関心を寄せて頂きました。続いて3名の講師の先生よりご講演を頂きました。



講演会の様子

今般の改正省エネルギー基準の策定に関わられた北方建築総合研究所環境科学部長の鈴木大隆先生からは、「住まいの省エネルギーと居住環境の質の両立を目指して」を演題に、住宅省エネルギー基準の改正に至った経緯、改正の概要とポイント、今後のスケジュールについての紹介と併せ、住まう場所によって風土、気候、住まい方や住宅そのものが異なる中で、居住環境の質を向上させ住まう人に豊かな暮らしをもたらすためにはどのようなことが必要か？また、省エネルギーとどのように両立させたら良いか？についての提言を頂きました。

首都大学東京都市環境学部教授の小泉雅生先生からは、「健康に暮らす住まいの設計手法」を演題に健康に暮らすための9つのキーワードについて紹介を頂き、「ヒートショックの心配がない」「結露が生じない壁断熱仕様」「カビ・ダニの発生を抑制できること」といった温熱環境も健康に暮らすための大きなキーワードであり、「健康」の観点からの住宅の設計が重要であることの提言を頂くとともに、健康と省エネ、創エネの両立を目指した住宅に関して多くの事例に基づいてご紹介を頂きました。

住宅技術評論家の南雄三先生からは、「日本の住宅省エネ・特殊事情」を演題に、住宅の省エネルギー基準の義務化のためにはどの程度の断熱性が最低基準なのかを明確にする必要があり、また、義務化をするのであれば基準値は無理のないレベルとすべきであるとの提言を頂くとともに、健康に暮らすためには住まいの温熱環境が非常に重要であることを広く知ってもらうことが義務化に先立って行うべきことであり、そのために基準判定の表示義務を課すべき。との提言を頂きました。

続いてパネルディスカッションが行われましたが、前掲の3名の講師の先生に加え、ミサワホーム(株)商品開発部第一設計課長の佐藤悦子氏、積水ハウス(株)大阪南支店設計課統括課長の小谷美樹氏、YKK AP(株)経営企画室事業開発部商品開発担当部長の白瀬哲夫氏にご登壇頂き、「義務化を想定した断熱水準や将来あるべき断熱水準について考える」をテーマに活発な議論を頂きましたが、議論に先立ち新たにご登壇頂いた3名のパネリストの皆様から、それぞれの会社における省エネの取組みについてご紹介を頂きました。



パネルディスカッションの様子

ミサワホーム(株)の佐藤氏からは、会社として1990年代から省エネ住宅の開発に取り組んできたこと、近年はLCCM（ライフサイクルカーボンマイナス）住宅を目指し開発を行っていること、それに伴い開口部も樹脂サッシを用いた断熱強化の方向にあることなどの紹介を頂きました。

積水ハウス(株)の小谷氏からは、会社として1990年代から省エネ住宅の開発に取り組んできたこと、近年は、次世代省エネ基準（1999年基準）の標準化移行に加え更に進んだハイグレード断熱仕様をラインアップに加えるなど、2020年をにらんだ取組みを行っていることなどの紹介を頂きました。

YKK AP(株)の白瀬氏からは、現在、住宅業界ではZEH（ゼロエネルギーハウス）を目指した取り組みが行われており、窓メーカーとしてもZEHを想定した断熱性能を目標としていること、目標達成のためには開口部は樹脂サッシ、Low-E 複層ガラス仕様が必要であること。また、全国民の80%が居住する省エネ基準5～7地域(旧4地域)の断熱性能向上が必要であることなどの紹介を頂きました。

続いて行われましたパネルディスカッションでは、「改正省エネ水準は最低限の水準であり義務化は必要。更なるレベルアップを目指し取組むべき」「改正省エネ基準は誘導基準とし義務化は不要。住まう人の健康、省エネに対する意識の共有化を優先させるべき。必然とレベルアップに繋がって行く」「断熱レベルを基本、推奨、選択の3つに分けて整理をすることが必要」「省エネの周知には行政による補助金等のインセンティブが有効」などパネリストの皆様からそれぞれの立場で多くのご意見を頂くとともに、会場からも意見を頂き白熱したディスカッションとなりました。最後に坂本代表より「断熱水準がどうあるべきか？義務化は必要か否か？は非常に難しい問題だが、本日、提言頂いた「基本、推奨、選択」の考え方、「表示の義務化」等は今後も議論を深めて行く必要があると考える」とのまとめが行われ閉会となりました。

最後になりましたが、シンポジウムのコーディネーターをお務め頂きました坂本代表、ご講演を頂きました講師の先生の皆様、パネルディスカッションにご登壇頂きました3名の講師の皆様にも厚くお礼申し上げますとともに、公務ご多忙にも関わらずお越し頂きました行政の皆様にも厚くお礼申し上げます。

また、協賛、後援を頂きました多くの団体、行政の皆様には幅広くシンポジウムのご案内を頂き周知にご協力を賜りましたこと、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

本シンポジウムが、少しでも住まう人の居住環境の向上にお役に立てることを願い開催報告とさせていただきます。

## ■ 随想

### ◇古代ヤマトの遠景（81）－【蘇我氏による歴史改竄】－

木下 清隆

これまで数回に亘って、初代倭王は「櫛玉饒速日尊」、更には「天照国照彦火明櫛玉饒速日尊」なる諡号を贈られたことを論じてきた。前者は欽明天皇、後者は敏達天皇からのものである。敏達天皇はこのような立派な諡号を献ずることによって、初代倭王を天皇家の祖神からヤマト国家の祖神に格上げし、ここにヤマト国家の統一は成った。このまま進めば、我が国の歴史も現在知られているものとは大いに変わったものになったはずであるが、ここに最後の一波乱が起きる。それは蘇我氏問題である。

蘇我氏は、欽明天皇擁立のために、継体天皇の二人の皇子を殺害するという大博打を打ち、ここから申し上がってくる。そして、彼らは自分たちの行為を韜晦するために、歴史の編纂事業を始める。その中に枉げられた歴史を挿入するためである。しかし、欽明・敏達という継体天皇直系の天皇達が存命中は、流石に勝手な振る舞いは出来なかった。従って、初代倭王から継体天皇までの出雲王家の系譜は、残された記録・伝承等を元にして、当時としてはかなり正確なものが記録されたと考えられる。しかし、継体以降が捏造された。殺された二皇子が、安閑天皇・宣化天皇として、記録に残されることになったからである。これこそが、蘇我氏の目的であった。欽明天皇も蘇我氏の方でその地位を得た以上、彼らの歴史歪曲を黙認するしかなかった。

このような前提から、欽明時代にその編纂事業が始められたとされる『帝紀』、『旧辞』の内容を想定すると、その主要なものは以下のようなものだったのではないかと考えられる。

- ① 倭国の神話時代の話は現在のものより遙かに簡素であり、高天原の最高神は、<sup>たかみむすひ</sup>高御産巢日神ではなく、<sup>かむむすひ</sup>神産巢日神とされた。この神は、出雲の祖神とされていたからである。
- ② 天照大神及び素戔嗚尊は未だ誕生していない。
- ③ 初代倭王は、出雲の王であり、その王が出雲から大和入りするまでの話は、船旅としてかなり正確なものが残されていた。
- ④ 神武天皇～開化天皇の九代の天皇は存在していなかった。更に日本武尊も存在していなかった。
- ⑤ 継体天皇の西国制圧の記録は、直近の武勇伝であり、極めて正確な記録が残されていた。

その後、敏達天皇が亡くなり、用明・崇峻を経て推古天皇という蘇我氏の長期政権が誕生すると、蘇我氏は政権維持のための具体的な行動を開始する。それは、諸豪族達の困り込みである。具体的には、彼らの系譜を天皇家に繋がるようにして、その仲介者である蘇我氏に忠誠を誓わせる仕組み作りである。豪族達にしてみれば、自分たちの祖のほとんどが第三者には全く知られていない人物である以上、天皇家の系譜に繋がることは願ってもない話である。ところが、実在した天皇の孫というのでは、事実関係を問われた場合に答えようがない。そのため、蘇我氏は初代の神武天皇と、その後継の八代の天皇を新たに創作した。諸豪族にとって、これら創作上の天皇の誰かに繋がること出来ればメデタシということである。ところが、その余波で初代倭王は始祖としての地位を失い、更に出雲出自の事実も消されることになった。初代倭王は開化天皇の皇子であり、その名は崇神天皇であるとのシナリオを彼らが書いた以上、出自が出雲では、筋が通らなくなるからである。

このような経緯から、蘇我氏は出雲王家の抹消という、第二の歴史の歪曲に手を染めることになった。第一の継体天皇の皇子達を安閑・宣化天皇として蘇生させた問題はまだ罪が軽い。これに対し、出雲王家の抹消は遙かに罪が重い。蘇我氏、石川地方出自説に立てば、彼らは、基本的に大和盆地の中にそのルーツを持たない、よそ者だったことになる。更に彼らが欽明朝に申し上がった経緯は誰もが知っている。後ろめたい過去を背負っているのである。その彼らが天下の大権を握った。自分たちの権力を安泰にするためには、諸豪族達を手なずけなければならない。その手段として、系譜の創作が最も効果的だ、と判断するに至ったのは、彼らにとって必然であったと云えよう。

このような策を弄する蘇我氏を見るとき、その権力基盤が如何に脆弱なものであったかがよく理解できる。それは豪族達との繋がりが心と心ではなく、単なる欲得の繋がりに過ぎなかったからである。<sup>いっし</sup>乙巳の変で、入鹿が中大兄皇子達に殺されると蝦夷も自殺し、いとも簡単に蘇我氏が滅んだ。その理由の一つとして、この脆弱性を挙げる事が出来よう。

この蘇我氏による歴史改竄問題は、先に「[歴史の改竄](#)」(8)で触れたが、この時はまだ、蘇我氏による皇子殺害問題が話の中に登場していなかった。このため、『帝紀』、『旧辞』は既存のものとして、その改竄から話を始めたが、その後、蘇我氏による皇子殺害事件が歴史解釈上の必然性から登場してきた。この事件を前提として考えるなら、なぜ、欽明朝に『帝紀』、『旧辞』の編纂作業が開始されなければならなかったのかの理由が明確となってくる。この点が前回の改竄の稿と今回の稿との大きな相違点である。

この蘇我氏による歴史の改竄によって、多くの副産物が生まれてくるが、これらの内、出雲大社の創建はその副産物といえる。何故、大社は創建されたのか、その経緯と関連事項をまとめておくことにする。

## <出雲大社>

蘇我氏は初代倭王を神武天皇の皇統に取り込むため、「国譲り」なる物語を仕立て上げ、出雲を歴史の本流から抹消した。この場合、国譲りの主人公は、古事記では大国主命、日本書紀では大己貴命となっているが、何れも初代倭王の別名であり、彼らが創作した神々である。この時、蘇我氏はその代償として出雲大社を創建した。彼らとても、憎くて初代倭王を抹消したわけではない。已むに已まれぬ事情によるものである。従って、良心の呵責から大社を創建したと考えることは、決して的外れではないと言えよう。しかし、建造された場所は出雲平野の北のはずれである。何故こんな辺鄙な場所に建てられたのかは不思議である。



発掘された柱跡の場所を示した  
境内と再現された柱

この出雲大社は、杵築<sup>きづき</sup>なる地に築造されたため、当初から「杵築大社」と呼ばれ、江戸時代末までこの名で通っていた。ところが、明治時代になって、何故か「出雲大社」に変えられ現在に至っており、祭神は、大社側の説明では大国主命となっている。

この大社は持統天皇によって更に壮大なものに建て替えられ、高さ十六丈（約五十m）に及んだという。余りにも高いために三本の柱を鉄輪で結束し、さらに途中で繫いで長さ約50m、直系3mもの柱が九本も社殿を支えるために使用された。平成十二年（2000）に三本結束の柱の遺跡が本殿すぐ近くの地下から発掘され、伝承されていた文書の内容と一致したことから大きな話題となった。しかし、木材では腐敗や風雨に弱く、二十～三十年程度で倒壊したらしい。その度に建て替えられたが、鎌倉・室町時代になると造替費用の捻出に窮し、四丈五尺の低い神殿になったとの記録が残されている。現在の出雲大社は江戸時代の延享元年（1774）に築造されたもので、高さは八丈(二十四m)となっている。



出雲大社は伊勢神宮と同様に、それまでは神殿を全く新しく作り替える方式を採っていたが、延享元年の造替時をもって、この方式を止めている。1774年以降は全て修造(修理)レベルに留められているが、工事期間中は祭神の引っ越しが必要なため「遷宮」なる言葉が使用されている。同じ「遷宮」でも伊勢神宮の場合とでは、全く規模が異なっている点は注意を要する。今回は1953年以来、60年ぶりの遷宮であるが、前回と同様に屋根の葺き替えが主要工事である。出雲大社の屋根は檜皮葺となっており、伊勢神宮の茅葺きとは異なる。たまたま今回の葺き替え工事を見学する機会に恵まれたが、職人達が竹釘で檜皮を打ち留めて行



出雲大社  
(上：遷宮前 / 下：工事中)

く速さには驚いた。伊勢の場合は 20 年毎の式年遷宮となっているが、出雲の場合は、定期的な修造ではなく、建物の傷み具合と資金調達の目処から、遷宮事業が決められているようである。伊勢も出雲も一切公的資金は出されていないが、神社本庁の頂点に立つ伊勢神宮の資金調達力に、出雲大社は太刀打ちできないということである。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)  
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

東京上野で開催された、奈良興福寺の仏頭展を見に行きました。興福寺といえば、阿修羅像を思い浮かべる方も多いと思いますが、この「仏頭」は、持統天皇によって、祖父の石川麻呂の供養のために山田寺に建立された薬師如来像とのことです。その後、興福寺に移送され、火災により胴体が焼け落ち、その頭部も破損しゆがんでしまいました。破損仏でありながら国宝指定されたそのお顔はとても美しく、離れてみると真っ直ぐに前を見た視線に見据えられ、身の引き締まる思いがしました。(漠)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)